

イギリスにおける大学の建造物と家具の文化遺産的活用例 ——九州大学歴史的什器の保存・活用への参考的視点——

真保 晶子¹⁾・三島 美佐子²⁾

¹⁾芝浦工業大学システム理工学部：〒337-8570 埼玉県さいたま市見沼区深作307

shimbo@shibaura-it.ac.jp

²⁾九州大学総合研究博物館

要旨：本稿では、現代イギリス（主にイングランドとスコットランド）のナショナルトラスト（The National Trust）による文化遺産活用や、人々の関心を高め日常に根差す方策の事例と、イギリスの2つの大学ないしはカレッジにおける歴史的建造物と家具の保存・活用に関する事例から、九大博物館による歴史的什器の今後の保存・活用に向けた参考点を提示した。九大博物館が推進する歴史的什器の「在野保存」に関して、また、今後の博物館リニューアルにおける歴史的な建造物や什器の修復や活用の在り方に関して、市民が議論に参加することの必要性や、先行するイギリスの大学やカレッジにおけるより詳細な調査・分析の必要性を指摘した。

キーワード：文化遺産、大学歴史的建造物、大学歴史的家具、ナショナルトラスト、セント・アンドルーズ大学、ロンドン大学ロイヤルホロウェイ・カレッジ

1. はじめに

1.1 背景

日本の大学施設は通常、学生と教職員が学習・教育や研究のために使用することを主目的としているため、公共施設や店舗ほどは完全に開かれていない。しかし近年は「開かれた大学づくり」が推奨されていることもあり¹⁾、見学や公開行事など様々な訪問機会の提供により、外部の人々の目に触れたり利用されうる場となっている。また大学は、キャンパス移転、合併、閉鎖などがしばしばあるものの、基本的には人材育成の場としての持続性が求められるため、元来モノやコトを継承するのに適していると考えられる。従って大学は、その建造物等を使いながら活用・共有・保存するという点で、適切な場と運営主体となり得る。実際、多くの大学の建造物が重要文化財、登録有形文化財（建造物）としてその歴史的価値を認められ、受け継がれている²⁾。

大学にとって伝統と歴史はブランドとしての大きな強みの一つであり、建造物やそこで使用されていた什器等

の物品は、大学の持続性を具体的に象徴する物証である。つまりそれらは、内部においては数世紀にわたり受け継がれる学生たちの共有物として、大学の歴史を形成し象徴するものとして愛着の対象となり、外部に向けては、大学の伝統を表明することができ、現実的にも大学への関心をもってもらうことにつながると考えられる。特に地域の人々にとっては、地域の歴史の一部として感じてもらえることができ、それ以外の人々にとっても、時代や一時期を象徴する文化遺産として共有してもらえらる。総じて、大学の建造物や什器類を保存し、内部・外部の人々がともにそれらを活用することは、それらを通じた大学と地域のアイデンティティの形成と、モノを通じた歴史の共有を可能とし、その大学にとってのアドバンテージになりうると考えられる。

九州大学総合研究博物館（以下九大博物館）では、箱崎キャンパスの移転時に廃棄されかけていた九州大学の歴史的什器を回収・コレクション化しており、2016年からは、学外の事業者等に貸し出し使用しながら保存・継承する「在野保存」を試みている³⁾。また、2018年にキャ

ンパスの最終移転が完了し、跡地に残った歴史的建造物を含む保存地区を、九州大学が継続所有することが定まったことを受け、九大博物館の暫定的ではあるが新たな将来計画が策定された。その中で、残存する歴史的建造物の一部をリニューアルし大学博物館施設として2027年度中にオープンする計画があり⁴、その際には九大歴史的什器（以下九大什器）をふんだんに活用していくことが盛り込まれている⁵。いずれにおいても、建物や家具の今後のよりよい持続的保全・活用にむけた早期の考察・提案が必要であると思われるが、九州大学および九大博物館では現状、実践や現場対応に注力しており、学術的な論拠に基づく議論がほとんどなされてきていない。

1.2 先行研究と近年の動向

イギリスでは家具研究が盛んであり、古い家具類の利活用についても日本より先行している。例えば本稿で後述するイギリスのナショナルトラストでは、博物館収蔵した家具調度品を、元々それらが用いられていたカンントリーハウスに「貸し返す」ような取り組みがなされている⁶。このような取り組みに、九大什器の学内再利用や学内貸出は類することが指摘されている⁷。そのような取り組みにおける実践に関する技術的な知見と同時に、九大博物館の将来構想としての歴史的な建造物と什器の利活用の文脈においては、イギリスの先行事例における文化遺産への捉え方や考え方、そしてその活用例が、移転跡地に残り歴史的建造物と資料を活用しながら社会に開かれた生涯学習の拠点としての役割を担う九大博物館にとって大いに参考になる。

日本の近代家具研究や大学所蔵の家具コレクションはこれまで、特色あるデザイナー家具が中心であり⁸、日常使用される木製家具研究はようやく緒に就いたところである⁹。とりわけ大学を含む近代以降の学校什器はこれまで殆ど扱われておらず、さらなる研究が期待される領域である。イギリスでもほぼ同様¹⁰であり、大学が所有する歴史的什器に関する網羅的・俯瞰的な報告は殆どないため、本稿では、イギリスの大学のウェブサイトやそこに挙げられた画像および大学アーカイブ所蔵写真などから、保存・活用の現状の情報を得ることを試みる。また、イングランドとウェールズに適用される「計画（登録建造物および保存地区）法」（1990年）（Planning (Listed Buildings and Conservation Areas) Act 1990）に基づく、歴

史的建造物を保存する登録建造物（Listed Buildings）についてはいくつかの研究があるが、概観的研究および町並み保存や産業遺産の事例が主である¹¹。本稿の後半では、より具体的に大学の事例を取り上げ、登録建造物における家具の扱い、および大学による家具を含めた登録建造物の活用に焦点を当てる。

1.3 本稿の目的

本稿では、現代イギリスに残る文化遺産の活用例等を挙げ、九大博物館による九大什器の活用への参考点を提示することを目的とする。まず、イギリスの文化遺産への関心と取り組みの背景として19世紀から続くナショナルトラスト（The National Trust）を取り上げ、人々の文化遺産と修復への関心を高め、日常に根差す方策を概観する。次に、イギリスの大学および大学を構成するカレッジの中からそれぞれ2つの例を挙げ、その歴史的建造物と家具に関して、文献情報やオンライン上の画像および大学史の写真集で使用された大学アーカイブ所蔵写真等で把握できる情報を明らかにする。最後にそれらの事例を元に、九大什器の今後の活用について論じる。

2. イギリスの文化遺産への関心と取り組みに関する文化的背景——ナショナルトラストによる保存と市民の参加

2.1 ナショナルトラスト（イングランド）の例

本節ではまず、イギリスの文化遺産への関心と取り組みの背景として19世紀から続くナショナルトラストを取り上げ、人々の文化遺産と修復への関心を高め、日常に根差す方策を概観する。

工業化、都市化、農村社会の衰退が進み、自然が破壊、土地の売却も進む背景の下、1895年のイギリスで、ナショナルトラスト（正式名は「歴史的名勝地および自然景勝地のためのナショナルトラスト（The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty）」が設立された¹²。「国民のために自然景勝地や歴史的な名勝地を永久に保存し、かつその質を高め、土地については（実行可能なかぎり）自然のままの状態、特徴そして動物および植物の生命を保全すること」という目的を履行するために、「土地や家屋（建造物を含む）そしてそれらに付随す

る採取権や地役権などの諸権利を贈与あるいは売買によって取得し所有すること」そして「それらを大衆にレクリエーションあるいは教育のために供すること」を活動方針とする¹³。

ナショナルトラストには、実際に訪れることや、ボランティア、グループやクラブ、学習機会（講演や講座）¹⁴など、市民が参加する仕組みが様々にある。また、団体が所有する土地建物にレストランなどを建て、飲食物を販売したり、入場料金、所有の土地や建物の貸し出しの他、会員会費や寄付金など¹⁵もナショナルトラストに限らず、団体の運営資金として通常考えられる方法である。だが、現在修復中の建造物など具体的な例を示し、具体的な寄付金を示唆する¹⁶ということは、寄付をする対象が明確になるという点で、寄付をする側にとってわかりやすくなる。さらに、所有する土地や庭や建物をナショナルトラストへ贈与しようとする市民に、遺言書など手続きの仕方までナショナルトラストがガイダンスすることも可能ということである¹⁷。

文化遺産と修復への理解と関心を高めるという点では、ナショナルトラストの収蔵品を修復するロイヤル・オーク・ファンデーション保存スタジオ（The Royal Oak Foundation Conservation Studio）が一般に公開されており、日常の修復作業なども見学できる¹⁸。この保存スタジオそのものが、ケント（Kent）州ノウル・ハウス（Knole House）にある、15世紀にできた納屋の内部を使用した歴史的建造物を活用した作業スペースである¹⁹。ウェブサイトではオリジナルの状態のまま残っている17世紀前半のノウル・ソファ（Knole Sofa）が取り上げられ、「テキスタイルが光に弱く、通常は長く持たないため、それほど立派に見えないかもしれないが、ソファがこの状態で保存されていることは非常に重要だ」と述べられ、修復後にまたノウル・ハウスで公開されている²⁰と伝えられている。このことは、少なくともこのソファについては、「修復後は公開されることが前提だ」というメッセージであると読み取れるであろう。

また、ナショナルトラストではダービシャー（Derbyshire）のサドバリホール（Sudbury Hall）という17世紀の邸宅で「子供たちのカントリーハウス」（‘The Children’s Country House’）という子供向けの体験プログラムも行っており、大広間や書斎などで当時の人々の体験をすることに加え、火事や洪水、光などがどのように歴史的なコレクション

を損なう恐れがあるかを学ぶ機会を提供している²¹。このように、ナショナルトラストでは文化遺産への長期的な関心を子供のころから育てる取り組みも行っている。

2.2 ナショナルトラスト・スコットランドの例

さらに、市民に対し、建造物の修復への関心を高めるという点で、ナショナルトラスト・スコットランド（The National Trust for Scotland for Places of Historic Interest or Natural Beauty：以下 NTS と略）の行う、チャールズ・レニー・マッキントッシュ（Charles Rennie Mackintosh）が設計した住宅、ヒルハウス（The Hill House 1903年建設）の修繕プログラムが注目に値する²²。ヒルハウスの修繕の第1段階は、「文化遺産見学者の経験」のため、2019年6月から外側から一般公開されている。「ヒルハウスボックス（The Hill House Box）」と名付けられた、雨から守るメッシュで覆い、外壁を乾かす間、そのメッシュの覆いの中、住宅をスチールのフレームで足場のような通路が囲み、見学者はその通路を歩き、ヒルハウスを地上、2階、さらに屋根の上の高さの通路から見るができる仕組みになっている²³。また、NTSは見学者に対し、ヒルハウス修繕チームへの質問を呼びかけ、「次の10年にわたるヒルハウスについて建築家、修復専門家、歴史家が持とうとしている対話へあなたが参加する機会だ」とも促している²⁴。このように、修繕や修復という過程そのものも市民へ公開し、議論へも参加する道を拓くという点に、このプログラムの大きな意義があるといえる。

もう一つ特筆すべきNTSのプロジェクトとして小住宅改良計画（The Little Houses Improvement Scheme: LHIS）がある。解体の危機にあったスコットランド東部ファイフ（Fife）の町クーラス（Culross）の伝統的住宅をレスキューするキャンペーンが1932年にあり、1960年までにNTSが50軒を所有し、修復した²⁵。しかし、これは修復・保存にとどまらなかった。このクーラスでのプロジェクトが発展し、NTSは1960年に小住宅改良計画を開始し、特色を持った歴史的住宅を修復し、修復後その住宅を売却し、その利益が次の修復プロジェクトの財源となるという仕組みを築いた²⁶。そうすることで、建造物の当該時期の重要な特徴を保持しながら、現代の生活に合うよう適応もさせること（例えば床や屋根の入替）とのバランスを取ることもなる²⁷。まさに使用されることによって保存する、かつ使用されることで次の歴史的住宅の保

存につながる、という実践的な考えである。

2.3 小結

文化遺産への関心を高め、その修復、保存、活用を人々の日常に根差すという点で、イングランドとスコットランドのナショナルトラストのこれらの活動は大きな意義があり、日本の同様な活動の参考になると言える。これらの事例を参考に、九大什器のプロジェクトで応用するとすれば、現状のように九大什器を個々に貸し出すことに加え、九大博物館や貸出先を実際に市民が訪れる機会や話し合う場を作ったり、熱心な市民にはボランティアとして運営にも参加してもらえらる仕組みを作ってみることが考えられる。これにより、2018年に開催された歴史的什器の保存と活用に関するシンポジウム²⁸のテーマで取り上げられた、互いが「つながり」ながら「使いながら守る」ことが可能になるだろう。九大什器は2018年に実施されたクラウドファンディング²⁹でも人々の大きな注目と支持を集めた。一大学の所有を超えた文化資源として市民に親しまれる九大什器も、今後、その修復や活用の在り方に関して、市民のさらなる議論への参加があればより良いものとなるだろう。

3. イギリスの大学の歴史的建造物と家具の活用に関する例

次に本節では、イギリスの大学、あるいは大学を構成するカレッジの中から2つの例を挙げ、その歴史的建造物と家具に関して、文献情報で把握できる参考点を整理する。第一に、スコットランド最古の歴史を持つセント・アンドルーズ大学 (University of St Andrews) の附属博物館の一つであるコレクションズ・センター (Collections Centre) における歴史的大学家具の活用例を見ていく。この大学博物館を選んだ理由は、大学の歴史にとって大学由来の家具を重要であるとみなし、「遺産」という枠組みでそのコレクションを活用している点が明確であり、九大博物館の理念にも共通するものがあると考えられるからである。第二に、より九大什器コレクションに近い年代の建造物やその家具に関わる事例として、ヒストリック・イングランド (Historic England) のグレード I の登録建造物ロイヤルホロウェイ・カレッジ (Royal Holloway,

University of London) のファウンダーズ・ビルディング (Founder's Building) (1879 - 87年建設) を取り上げ、文献情報をもとにした調査段階をまとめる。

3.1 セント・アンドルーズ大学博物館における歴史的建造物と家具の活用

第一の例は、スコットランド最古の歴史を持つセント・アンドルーズ大学 (創立1413年) の附属博物館の一つであるコレクションズ・センターである³⁰。セント・アンドルーズ大学の附属博物館には、ウォードロー博物館 (Wardlaw Museum) (芸術、歴史、科学、自然史コレクション)、ベル・ペティグルー自然史博物館 (The Bell Pettigrew Museum of Natural History)、そしてコレクションズ・センター (Collections Centre) の3つの博物館がある³¹。合わせて約115,000件の収蔵品について、ウォードローとベル・ペティグルーの両博物館が展示を行い、一部は大学キャンパス内にも展示され、コレクションズ・センターで保管と研究を専門に行っている³²。このコレクションズ・センターには、「遺産 (Heritage)」という「大部分が大学の歴史に関係する」コレクションがあり、これらは「純粋芸術、銀製品、家具、衣装、布、コインとメダル、考古資料」を含んでおり、スコットランドの重要認定コレクション (Recognised Collections of National Significance) の一つとされている³³。他の2つの重要コレクションも含め、同大学博物館はこれらが貸出と展覧会だけでなく、研究と教育にも活用できると博物館ウェブサイトで呼びかけている³⁴。「貸出 (loans)」と「展覧会 (exhibitions)」が分けて記載されていることから、貸出は展覧会に伴うものに限らないと推測できる。

このセント・アンドルーズ大学コレクションズ・センター所蔵の「遺産」コレクションの家具のカテゴリーの収蔵品を見ていくと次のような説明がある。「家具のコレクションはスコットランドの家具の歴史と発展、そしてスコットランド最古の大学のフォーマルな部屋、レクチャーシアター、実験室、カレッジ、寮の中において、組織・居住の両方の状況でどのように使用されていたかに関する重要な物質的な証拠を示す。それは大学の存続の歴史のまさに構造となるものを象徴する」³⁵。例えば、収蔵品の一つ、石のスツール「ブラックストーン」は、学生が修士学位の口頭試問を受ける際、15~18世紀まで使用されていたと説明されている³⁶。学生や教職員が日

常に使用していた家具が現在も残っているという近代以降の例については、次のような説明もある。「大学の部屋のいくつかの室内装飾もまた興味深い。理事室（1826年）の現在ある家具調度品のほとんどはサー・ロバート・ローランド・アンダーソン（Sir Robert Rowand Anderson）によってデザインされ、1897-98年から存在する。セント・メアリー・カレッジ（St Mary's College）にある、『学生の寝室（the student bedchamber or 'bunk room'）』の18世紀の家具調度品は保持されている³⁷。」

学内での歴史的什器活用の一例として、この神学部のあるセント・メアリー・カレッジ（現在の場所では1530年代から存続）³⁸における歴史的建造物と大学家具の活用を神学部による施設説明をもとに見てみよう。まず、セント・メアリー・カレッジ・ホールには大学の18世紀の家具のいくつかが収められている³⁹。カレッジ・ホールに新しい肖像画を注文するための寄付を呼び掛ける神学部による2019年12月のニュースでは、「木製パネルの天井、大きい暖炉、そして18世紀の家具のあるこのカレッジ・ホールはそれまでの世紀と大部分変わらない」と言い表され、現在、このホールはリサーチセミナー、論文試問、スタッフの会議などに使用されていると説明されている⁴⁰。また、前述のコレクションズ・センターによる学内の室内装飾の説明で言及された、18世紀には寮の寝室であった場所は、現在、神学部学生の3つの談話室のうちの一つとして使われ、現在も「寝室（'The Bunk Room'）」というニックネームで呼ばれ、18世紀の家具のいくつかがそこに保持されている⁴¹。さらに、神学部によるキング・ジェイムズ図書館（17世紀建設）の歴史をたどる記述では、1640年代に「教授は〔引用者注：この図書館の〕ホールの中央に木製の椅子に座り、学生は両側のベンチに座った。試験では、学生は、教授の椅子の隣にある黒い石の台の上に立つよう求められ、そこでクラスの皆の前でラテン語で口頭で試験を受けさせられた。教授の椅子と石の台は現在セント・アンドルーズ大学博物館（MUSA）にある⁴²。」と博物館のリンクを示しており、上述の石のスツール「ブラックストーン」へ行き着く。このように学部の施設説明において、大学に伝わる歴史的家具を共有財産として取り上げ、学部と博物館が連携し、学生へ向け、この勉学のシンボルともいえるスツールへの関心を引き寄せている。この歴史的家具を通して、学生に、歴史が現代へ連なる場所に身を置いている

ことに気付かせ、脈々と受け継がれる伝統とともに勉学に励む意識をより高めることをも促す。

3.2 ロンドン大学ロイヤルホロウェイ・カレッジの例

第二に、ヒストリック・イングランドのグレードIの登録建造物を持つ大学の一例として、ロイヤルホロウェイ・カレッジを取り上げ、文献情報をもとにした調査段階をまとめる。19世紀後半に設立されたカレッジの例を見ることで、大学における近代の歴史的建造物と家具の扱いについて考える。

3.2.1 歴史的建造物の保存——ヒストリック・イングランドの「登録建造物」

イングランドの歴史的建造物の調査・修復・管理を行うイングリッシュ・ヘリテージ（English Heritage, 1984年設立）から2015年に分かれたヒストリック・イングランド（Historic England: 以下HEと略）は、歴史的建造物を登録建造物（Listed Buildings）として、建築上、歴史上特に重要な順にグレードI、グレードII*、グレードIIとして選定手続きをし、文化・メディア・スポーツ省へ推薦をする⁴³。登録建造物（Listed Buildings）が記載されているThe National Heritage List for England（NHLE）には、2023年末現在、約50万件がリストされている⁴⁴。一般的な原則は以下のように説明されている。「オリジナルの状態に近い状態で残っている、1700年以前に建設された建造物はほぼすべて登録される見込みである。1700年から1850年の間に建設されたほとんどの建造物も同様である。1945年以降の期間に建設された建造物については特に慎重な選択が必要とされる。築30年以下の建造物は通常、特別な建築的あるいは歴史的価値を考慮されない。まだ時の試練に耐えたとはいえないからである」⁴⁵。グレードI、グレードII*、グレードIIの全登録建造物中に占める割合は、それぞれ2.5%、5.8%、91.7%である⁴⁶。

登録建造物の中で、家具はどのように扱われているかを実際にHEの資料から文言を確認してみたい。登録建造物の「公式登録記載事項（Official list entry）」の中では、前述の1990年法の関係条項を要約して次のように述べられている。「登録記載事項に別に述べられていない限り、それは建造物そのものおよび、登録建造物に付随する物と構築物（内部あるいは外部に関わらず）、また登録建造物の敷地内の物と構築物をも含む⁴⁷。」さらに、所有者が「登録建造物の特別な建築的、歴史的価値を持つ特

徴や外観に影響する方法で建造物を変更、拡張、取り壊しを行いたいという場合、「登録建造物に対する同意」(Listed Building Consent)が必要になるかどうかの基準が説明されたHEの資料⁴⁸には室内に関する項目も記載されている。ドア、ドア付属品、窓とその備品、カーテンとそのレールやハンギングなど、照明、壁や壁紙等、暖炉関連、床、台所備品、浴室備品、その他室内装飾全般に関しての項目があるが、狭義の家具に関しては「造り付けの家具」(fitted furniture)という1項目があるのみである⁴⁹。この歴史的な「造り付けの家具」(fitted furniture)としては具体的には「隅戸棚」(corner cupboards)、「台所の造り付け食器棚(兼調理台)」(fitted dressers)、「窓下の腰掛」(window seats)、「階段下の戸棚」(understair cupboards)などが例示されており、それらについては「おそらく特別な価値があるものに該当する見込み」であり、「軽微な修理、メンテナンス、塗り直しなどの修理(Minor repair, maintenance and redecoration)については登録建造物に対する同意が必要になることはほとんどなさそう」だが、「撤去(removal)については特別な価値に影響を与えるであろうため、登録建造物に対する同意が必要になる」と説明されている⁵⁰。さらなる調査が必要ではあるが、この資料を見る限りでは、建造物そのものに比べ、家具に関しては比較的細かな基準が示されていない。

3.2.2 大学における歴史的な建造物と家具の保存・活用例 — ロンドン大学ロイヤルホロウェイ・カレッジの例

HEのグレードI登録建造物を持つロイヤルホロウェイ・カレッジにおける歴史的建造物と家具の保存・活用例を以下、具体的に見ていきたい。ロンドン近郊のサリー州(Surrey County)の町エガム(Egham)にあるロイヤルホロウェイ・カレッジは1886年、企業家トマス・ホロウェイ(Thomas Holloway)によって女子の高等教育カレッジとして設立され、1900年にはロンドン大学の一部となった⁵¹。20世紀後半には共学になり、1985年にはロンドンのベッドフォード・カレッジ(Bedford College)と合併し、1992年以降、Royal Holloway, University of London (RHUL)という名称が使用されてきた⁵²。135エーカー(約546,000㎡)のキャンパスは全英で最も美しいキャンパスの一つと言われている⁵³。その中心となる建造物が設立当初の校舎および学生寮であり、現在も使用

されているファウンダーズ・ビルディングである(図1)。W.H.クロスランド(W.H. Crossland)によって設計された、2つの中庭を持つ4階建ての赤レンガのこの建物は、チャペル、ピクチャーギャラリーなども含め、前述したように、HEの登録建造物ではグレードIと認定されている⁵⁴。現在も、チャペル、ピクチャーギャラリー、ダイニングホール、読書室、レクチャーシアター、学生寮などとして使用されている⁵⁵。



図1 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ ファウンダーズビルディング外観

<https://www.royalholloway.ac.uk/student-life/accommodation/undergraduate/founders/>

アクセス日: 2024年1月4日

Courtesy of Royal Holloway, University of London

2010年代から新校舎建設が相次ぎ、キャンパスにはこの19世紀の校舎と、その後の20世紀の校舎、そして最新の21世紀の校舎が並立している⁵⁶が、現在のカレッジのウェブサイトや入学案内などを見ても表紙には依然としてこのファウンダーズ・ビルディングが中心を占めている⁵⁷。また、カレッジのロゴマークの形は「ファウンダーズ・ビルディングの2つの中庭のような2つの正方形から成り立ち」、色も「ファウンダーズ・ビルディングに着想を得た、深いスレート・グレーと対照して引き立たせる強く鮮やかなレンガのオレンジ色」が使われているとカレッジが説明する⁵⁸ように、この建物がカレッジの象徴としてとらえられている。

HEの登録建造物として指定されている大学の建造物の記載にも、家具調度品についての言及は少ない。以下に取り上げるロイヤルホロウェイ・カレッジには、HEの登録建造物グレードIのファウンダーズ・ビルディング(1879-87)があるが、それに関する記載では、ダイニングホール、ピクチャーギャラリー、チャペルの室内に

関しては窓や天井など内装についての記述が中心であり、家具調度品についてはダイニングホールの照明（‘Bronze light fittings’）、ピクチャーギャラリーのシャンデリア（‘Five brass chandeliers’）、チャペルの祭壇（‘Simple carved oak altar table’）などごくわずかが言及されているのみである⁵⁹。本項では、ウェブサイト上の現代の写真と、125周年記念大学史（冊子）に掲載された19世紀末から20世紀初頭の写真で把握できる範囲での家具の現存を確認し、今後のさらなる調査への土台とすることを試みる。

まず、HEの登録建造物の記載でも記述されたダイニングホールである。創立125年を記念した写真集にも出ている1900年の写真（図2）⁶⁰と比べると、大学ウェブサイトで見られる現在のダイニングホールでは当時の椅子とは異なるものが使われており、また、シャンデリアは同じものようだが、他の照明は異なる⁶¹（図3）。HEの登録建造物の室内の記載では取り上げられていないが、学生寮についても比較する。同建物内の125周年記念の写真集に出ている1893年の写真と比べると、大学ウェブサイトの外部向け宿泊室写真や新入生向け案内動画で見られる現在のファウンダーズ学生寮は、ドア、暖炉の跡などは残されているが、室内は現代的になっている⁶²（図4）。大学ウェブサイトの外部向け宿泊室の説明では、ファウンダーズの部屋は「スタンダードシングルとツインルームは素晴らしいグレード1登録建造物ファウンダーズ・ビルディングにある。」と言及され、他の建物が浴室トイレ付であるのに対し、「各廊下にある共有バスルーム設備とパントリー」にふれている⁶³。「追加情報」の欄では、「全室が近年、イングリッシュ・ヘリテージの基準に従って改装された」という説明がある⁶⁴。

一方、HEの登録建造物の室内の記載では取り上げられていないが、同建物内のレクチャーシアターには備え付けの机・椅子がある。125周年記念の写真集（2012年発行）でも、「ベンチのトップにある個々の番号の部分にはなくなったが、今日もオリジナルの家具の多くは保持されている。机上はめ込み型のインク壺はそのスライド式の真鍮の蓋とともに、過去を思い出させる。近年、座席が布張りになったにもかかわらず、座席の座り心地はあまり快適ではない」と説明されている⁶⁵。また2021年11月のカレッジの図書館・アーカイブのツイッターによれば、1896年ごろ（図5）と2021年11月（図6）時点での写真を見比べ、大部分変化がない、と述べられている⁶⁶。



図2 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ ダイニングホール (c. 1900)

RHC PH/101/7 Archives, Royal Holloway, University of London
Courtesy of Archives, Royal Holloway, University of London



図3 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ現在のファウンダーズダイニングホール

<https://venue.royalholloway.ac.uk/event-spaces/types/founders-dining-hall>
アクセス日：2024年1月3日
Courtesy of Royal Holloway, University of London



図4 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ現在のファウンダーズ学生寮

<https://venue.royalholloway.ac.uk/accommodation/types/standard-accommodation/>
アクセス日：2024年1月3日
Courtesy of Royal Holloway, University of London



図5 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジレクチャーシアター (c. 1896)

RHC PH/114/1/1 Archives, Royal Holloway, University of London
 Courtesy of Archives, Royal Holloway, University of London



図6 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ現在のファウンダーズレクチャーシアター (2021年)

Royal Holloway Library and Archives Twitter (18 November 2021)
https://twitter.com/RHUL_Library/status/1461317379359748100
 アクセス日：2023年3月7日
 Courtesy of Royal Holloway, University of London

これらを見る限り、レクチャーシアターの家具はほぼ変わりなく使用されていることがわかる。

同じく HE の登録建造物の建物室内の記載では取り上げられていないが、ファウンダーズ図書館（現ファウンダーズ読書室）も室内と家具の継続使用という点で注目し得る。ファウンダーズ・ビルディング1階にもともとあった図書館は、蔵書の増加に伴い建物内の別のフロアやスペースに広がった後、別にベッドフォード図書館（Bedford Library）が1993年にでき、2つの図書館は併用されていたが、2017年新図書館デイヴィソン・ビルディ

ング（Davison Building）ができたことにより、ベッドフォード図書館は学部校舎へ転用、ファウンダーズ図書館は2018年改装を経て、一部が学生読書室として残されている⁶⁷。2021年入学案内では「ファウンダーズ・ビルディングにあるオリジナルのままの歴史的なヴィクトリアンスタイルの読書室はさらなる学習スペースを提供し、わが校の図書館サービスに不可欠な一部として役割を果たし続けている」と写真入りで紹介されている⁶⁸。125周年記念の写真集に出ているのは創立からだいぶ経った1937年の写真（図7）⁶⁹ではあるが、それと見比べると、大学ウェブサイトや入学案内などの写真で見られる現在のファウンダーズ読書室で使用されている本棚、テーブル、椅子は引き続き使用されており、通路をはさんで両側にテーブルを置く配置も維持されている⁷⁰（図8）。このように、少なくとも1937年から現代に至る約90年近くの間、ファウンダーズ・ビルディングの読書室は縮小されながらも、当時の家具とレイアウトが保たれていることがわかる。

このファウンダーズ・ビルディングは、映画撮影、結婚式、会合、会議などを用途とした外部利用者への一般貸し出しも行っている⁷¹。外部向け利用案内のサイトでも、「華麗に装飾されたヴィクトリアンスタイルの部屋、廊下やレクチャーシアターから、現代的な教室、寝室、浴室、そしてコーヒーショップまで」と内部の多様性を示しながらも、トップページで大きく取り上げられているのが「ヴィクトリアンスタイルの廊下（Victorian corridor）」である⁷²（図9）。この廊下にはキャビネットや椅子、絵画などが廊下の両側の壁に並び、廊下の一部でありながら通行する人々の目を引き付け、展示のように保存するスペースとして活かしている。そのほか、同じファウンダーズ・ビルディング内の「歴史的なヴィクトリアンスタイルの室内装飾」として役員会議室も写真入りで掲載され、会議やミーティング、食事会の場として外部利用が呼び掛けられている⁷³（図10）。このように、ロイヤルホロウェイ・カレッジでは、HEのグレードI登録建造物であるファウンダーズ・ビルディングは、内部においてはカレッジを象徴するものとしてその家具も一部引き継ぎながら継承し、外部に向けても教育機関としての用途以外に柔軟に利用されている。



図7 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジファウンダーズ図書館（1937年）

RHC PH/200/40 Archives, Royal Holloway, University of London

Courtesy of Archives, Royal Holloway, University of London



図8 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ現在のファウンダーズ読書室

'Founder's Reading Room is now open' (12 November 2018)

<https://intranet.royalholloway.ac.uk/students/news-events/news-articles/november-2018/re-opening-of-founders-reading-room.aspx>

アクセス日：2024年1月3日

Courtesy of Royal Holloway, University of London

3.3 小結

以上本節では、大学の家具を「遺産」として活用しているセント・アンドルーズ大学とその附属博物館、および、大学における近代の歴史的建造物と歴史的な家具を利活用しているロイヤルホロウェイ・カレッジの2例をみてきた。

前者では、大学由来の家具を文化遺産の一つとして重



図9 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ現在のファウンダーズビルディング「ヴィクトリアンコリドー」

<https://venue.royalholloway.ac.uk/filming/inside-spaces/>

アクセス日：2023年3月3日

Courtesy of Royal Holloway, University of London



図10 ロンドン大学ロイヤルホロウェイカレッジ現在のファウンダーズビルディング役員会議室の外部利用活用

<https://venue.royalholloway.ac.uk/event-spaces/types/founders-boardrooms/>

アクセス日：2023年3月3日

Courtesy of Royal Holloway, University of London

要であるとみなしそれらを活用している点で、コレクションズ・センターおよび例として挙げた神学部の場合は、日本の大学ではまだほとんどみられない姿勢であり、九大博物館が目指すところの参考となる。また、セント・アンドルーズ大学の附属博物館による「展覧会貸出」とは異なる「貸出」のカテゴリーにおける、貸出先、貸出条件や許可のプロセス、期間、料金徴収、貸出先による保存や公開の状況などを今後具体的に調査することで、九大博物館の在野保存や将来的な歴史的什器の保存・活用にとって有益な参考例になるであろう。

後者のロイヤルホロウェイ・カレッジは、セント・アンドルーズ大学のように家具類を「遺産」として位置付け焦点をあてる姿勢はみられなかったが、実質的には、保存と活用を日常的に実施しており大学の特色として位置付けていることが明らかになった。

一方で、それぞれが保存・活用している什器のより詳細な全貌については、本稿では明らかにできていない。セント・アンドルーズ大学の大学の歴史に関するコレクションの中で、「使用されている」とされる、教室や研究室、寮など日常生活で教職員や学生が使用していた通常の家具や近代の家具が、どの程度残されており、大学の家具が学内外でどのように活用されているか、また、ロイヤルホロウェイ・カレッジでは、画像にある建物以外での什器類の使用や活用があるかなど、今後明らかにしていくことが必要である。特に、九大博物館の在野保存のように建物と切り離して大学什器を学外へ貸し出したりしているのか、あるいは売却などもしているのか、もしそうである場合はその結果、どのように大学家具がその新たな場所と用途で活用されているかなどについても今後調査を要する。

大学の什器が学内外でどのように保存・活用されているかを今後ヒアリングや大学資料等で詳細に調査するには、以下のような複数のレベルで調査・分析し、その結果を参考にしていく必要があるだろう。そのような調査・分析においては、上で見てきた事例や九大博物館での事例をもとに、学内外の活用について、以下のようなカテゴリー分けをして考えるとよいだろう。まず学内の活用においては、(a) 日常での活用、(b) 教育資料としての活用、(c) 附属博物館や関連学科／コースに関わる学内の研究者による研究対象としての活用、(d) 展覧会・見学など附属博物館を訪れる一般の方々に向けた活用、などが挙げられる。また、学外の活用においては、(e) 学外教育者・研究者による教育資料としての活用、特にその学外教育機関の種別（小・中・高校、各種学校、大学教育など）ごとの活用、(f) 学外研究者による研究対象としての活用、(g) 展覧会・見学など外部博物館での活用、(h) 貸出、などが挙げられる。このようなカテゴリーを元に、その活用例を参考にしたり、評価したりしていくことができるであろう。

4. おわりに

イングリッシュヘリテージで活躍してきたフィリップ・デイヴィースは、著書『芸術の都 ロンドン大図鑑』において、インテリアが使用されないと劣化することや、

逆にそのままの状態で開催された部屋に当時に伝える歴史的意義を見出しながら、ロンドンの様々な歴史的建造物の室内を紹介している⁷⁴。同様に大学家具でも、劣化したまま放置するのではなく、また、大事にしまい込んで保存するだけでなく、日常で使いながら、その家具が生きた時代が現在まで続いていることを示すことが可能となるであろう。本稿の後半で見てきたロイヤルホロウェイ・カレッジのように、19世紀後半以降の比較的歴史の浅い家具が文化遺産として特別な意義を持つとすれば、それは大学という特定の場で大勢の人々によって引き継がれ繰り返し日常で使用されてきたことにある。学内においては大学を象徴する建物に付随してその家具も大学と学生たちにとってのアイデンティティの一部となってきたこと、そして外部の人々にとってはその事実に対する何らかの共感が得られたときに、その家具に他にはない価値を見出し得る。

本稿で見てきた例を参考にしながら、九州大学歴史的家具の活用に関連して、以下3つの観点から、大学家具の学外でのさらなる活用が考えられる。第一に、すでに述べた「アイデンティティ」という点に注目すれば、大学内部においては、校友会など卒業生による九州大学歴史的家具の利用が考えられる。卒業生であれば相互のつながりや組織化、ヴォランティア、博物館へのサポート母体となることへの可能性もある。このことは、三島(2018)⁷⁵の構想する活用、特に資金化に関わる課題への糸口にもなるであろう。

第二に、三島(2018)でも言及されている地域の学校や民間などへの貸し出しおよびそれによる博物館体験⁷⁶を拡大させたものとして、大学を含めた他の研究ないしは教育機関への長期有償貸出あるいは売却が考えられる。本稿で挙げたセントアンドルーズ大学コレクションズセンターの場合、大学家具の研究・教育利用を呼び掛けたのは、一時的な研究材料としての利用や一時的な貸し出しであったと思われる。また、新井・三島(2018)で言及されている大学関連コースでの実習の利用も、主に学内および近隣の建築・デザイン関係学科などを想定している⁷⁷。ここではそれらを発展させ、各賛同的機関が九大家具を手元に置き、日常的に使用しながら、教育・研究に活用するという事も考えられる。その場合、なぜ九大家具を他機関で活用するのかという理由づけが必要になる。そのためには、それらの家具が使用されていた

時代への理解と、一大学を超えた共有財産としての認識が、受け手となる他研究・教育機関に必要となる。したがって、そのような歴史的な理解と共有財産としての認識を共有すること自体もまた、「貸出」の過程の一部になり、そのような考え方が伝播されることにつながる。

第三として、すでに九州大学総合研究博物館によって行われているように、地域との連携の一環として、歴史的な家具やその保存・活用に共感してくれる地域の施設での活用をさらに拡大することが考えられる。大学の歴史的建造物とその地域の地理的にも心理的にもランドマークとして受け入れられるように、その中にあった家具も地域の歴史の一部となり得る。

このような活用をとおして、大学家具は、最終的には、最初に置かれた属性や地域をも超え、人々の共有財産となり得ると考えられる。大学の歴史的建造物の陰に隠れた存在の大学家具は、いわばその空間と時代の観察者として、最初に置かれた場から移動されようとも、置かれていた空間と時代を語るものとなり得る。すでに様々な新たな場で光を放っている九大家具から、それらは置かれていた場所から外へ出ることで新しい役割を果たす、生きた文化遺産として意義を持つことが導かれる。

謝辞

We are grateful to Archives, Royal Holloway, University of London, and Marketing and Communications, Royal Holloway, University of London for the permission of using the photographs in this article.

『九州大学総合研究博物館研究報告』編集委員会の先生方に深く御礼申し上げます。

注

- 1 文部科学省「開かれた大学づくり」https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/daigaku/index.htm アクセス日：2023年11月29日。
- 2 文化庁「国指定文化財等データベース」<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index> 文化庁「国指定文化財等データベース」で「大学」で検索した結果196件から「学校」の種別のもので抽出したところ、(1)重要文化財(建造物)「近代/学校」7件と登録有形文化財(建造物)、(2)種別「学校」(土木構造物、建築物、その他工作物)130件、(1)と(2)の合計137件が見られた。ここでは、別の種類の建造物から大学へ転用された例は除外した。アクセス日：2024年1月1日

なお、九州大学総合研究博物館が入る旧工学部本館は、2023年2月に、九州大学で初となる国登録有形文化財として登録された。

- 3 三島美佐子(2018)「九州大学総合研究博物館所蔵歴史的什器の保全と活用」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16: 65-68.
- 4 九州大学総合研究博物館ニュース(2023)39:1. <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/publications/NEWS/KyushuUniversityMuseumNews39.pdf> アクセス日：2023年11月29日。
- 5 九州大学基金 ニュース 2022.07.25『「総合研究博物館 箱崎サテライト拠点化事業」へのご支援のお願い』https://kikin.kyushu-u.ac.jp/info/news/view.php?cId=1558&r_search=&mode=1&page=1 アクセス日：2023年11月29日。
- 6 三島美佐子・新井竜治・真保晶子・吉田茂二郎・岩永省三・折田悦朗「活用文化財としての歴史的木製什器の在野保存——新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究——報告書」トヨタ財団2017年度研究助成プログラムTYTID D17-R-0714 報告書(2023):38pp. http://toyotafound.or.jp/research/2017/data/Misako_Mishima_Final_Report_D17-R-0714.pdf アクセス日：2023年11月29日。
- 7 同上。
- 8 例えば、武蔵野美術大学美術館の椅子コレクションなど。
- 9 例えば、新井竜治『戦後日本の木製家具』(2014年、家具新聞社)など。
- 10 ただし、British School Museum や Ragged School Museum など複数の学校博物館において、学校家具のコレクションが存在している。
- 11 大橋竜太(2007)『英国の建築保存と都市再生——歴史を活かしたまちづくりの歩み』(鹿島出版会):48, 200-201, 280-328, 遠藤翔太・岡崎篤行(2017)「英国における登録建造物制度の運用実態 イングランド・グレーターロンドン及びその周辺を対象として」『都市計画報告集』(日本都市計画学会)16-1:32-35など。また大橋(2007):292では「家具・家財等」は法律上、登録建造物の対象外であると言及されているが、この点についても本稿後半で具体的にみていく。
- 12 四元忠博『ナショナルトラストの軌跡Ⅱ 1945～1970年』(2015年、緑風出版):4; 四元忠博『ナショナルトラストの軌跡1895～1945年』(2003年、緑風出版):51-70.
- 13 ナショナルトラストの基本定款 The Companies Acts, 1862 to 1890 – Memorandum of Association of the National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty:5-9が四元『ナショナルトラストの軌跡1895～1945年』:39-40に言及されている。
- 14 <http://www.nationaltrust.org.uk/get-involved/> アクセス日：2015年7月16日。
- 15 同上。
- 16 同上。
- 17 同上。
- 18 <https://www.nationaltrust.org.uk/visit/kent/the-royal-oak-foundation-conservation-studio/our-work-at-royal-oak-foundation-conservation-studio> アクセス日：2023年2月17日。
- 19 同上。その他にナショナルトラストの内部組織としてテキ

- スタイル保存スタジオ (The Textile Conservation Studio) もノーフォークにある。 <https://www.nationaltrust.org.uk/visit/norfolk/the-textile-conservation-studio/our-work-at-the-textile-conservation-studio> アクセス日：2023年2月17日。
- 20 <https://www.nationaltrust.org.uk/visit/kent/the-royal-oak-foundation-conservation-studio/our-work-at-royal-oak-foundation-conservation-studio> アクセス日：2023年2月17日。
- 21 <https://www.nationaltrust.org.uk/visit/peak-district-derbyshire/the-childrens-country-house-at-sudbury/new-heritage-experience-opens-at-sudbury-hall> アクセス日：2023年2月17日。 サドバリーホールの歴史については <https://www.nationaltrust.org.uk/visit/peak-district-derbyshire/the-childrens-country-house-at-sudbury/history-of-sudbury-hall> アクセス日：2023年3月6日。
- 22 ナショナルトラスト・スコットランドは1931年に設立された。 <https://www.nts.org.uk/what-we-do/history> アクセス日：2023年3月6日。 <https://www.nts.org.uk/what-we-do/buildings> アクセス日：2023年3月6日。 続く一文も同じ出典。 The author is grateful to one of the students who took her course ‘History of Housing and Interior Design’ for drawing her attention to the conservation of the Hill House.
- 23 <https://www.nts.org.uk/what-we-do/buildings> および <https://www.nts.org.uk/visit/places/the-hill-house/highlights/hill-house-box> アクセス日：2023年3月6日。
- 24 同上。
- 25 <https://www.nts.org.uk/what-we-do/buildings> アクセス日：2023年3月6日。
- 26 同上。
- 27 同上。
- 28 トヨタ財団2017年度研究助成プログラム (研究代表者 三島美佐子)「活用文化財としての歴史の木製什器の在野保存——新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究——」キックオフシンポジウム「Furniture for Future 使いながら守る・つなげる 新たな仕組みとしかけの提案にむけて」2018年5月19日 九州大学総合研究博物館。
- 29 READYFOR「歴史的な木製学校家具を救え！九大什器保全活用プロジェクト」ページ内「プロジェクト概要」参照。 <https://readyfor.jp/projects/kyudai-furniture> (2023年5月最終閲覧)。
- 30 大学の歴史については、 <https://www.st-andrews.ac.uk/about/history/> アクセス日：2023年3月2日。
- 31 <https://www.st-andrews.ac.uk/museums/visit-us/> アクセス日：2023年3月3日。
- 32 <https://www.st-andrews.ac.uk/museums/collections/> アクセス日：2023年3月3日。
- 33 <https://www.st-andrews.ac.uk/museums/visit-us/collections-centre/> アクセス日：2023年3月3日。
- 34 同上。
- 35 <https://collections.st-andrews.ac.uk/collection/furniture/1004089> アクセス日：2023年3月2日。
- 36 同上。
- 37 同上。
- 38 神学部の歴史については <https://www.st-andrews.ac.uk/divinity/about/history/> アクセス日：2023年3月2日。 セント・メアリー・カレッジの建物の一部はヒストリック・エンヴァイロメント・スコットランド (Historic Environment Scotland: HES) の「カテゴリー A」(最重要)の登録建造物とされている。
- 39 <https://www.st-andrews.ac.uk/divinity/about/facilities/> アクセス日：2023年3月2日。
- 40 <https://www.st-andrews.ac.uk/divinity/news/title-72997-en.php> アクセス日：2023年3月2日。
- 41 <https://www.st-andrews.ac.uk/divinity/about/facilities/> アクセス日：2023年3月2日。
- 42 同上。
- 43 フィリップ・デイヴィース著，加藤耕一監訳 (2017)『芸術の都 ロンドン大図鑑 英国文化遺産と建築・インテリア・デザイン』：4；久末弥生 (2017)「イギリスの考古遺産法制と都市計画」、『創造都市研究 e』(大阪市立大学大学院創造都市研究科) 12-1：1，6-7；遠藤・岡崎 (2017)「英国における登録建造物制度の運用実態」：32-33。；大橋 (2007)『英国の建築保存と都市再生』：2-3。用語の日本語訳については概ね上記を参考とした。 <https://historicengland.org.uk/listing/what-is-designation/listed-buildings/> アクセス日：2023年12月31日。
- 44 <https://historicengland.org.uk/listing/what-is-designation/listed-buildings/> アクセス日：2023年12月31日。
- 45 同上。
- 46 <https://historicengland.org.uk/listing/what-is-designation/listed-buildings/> アクセス日：2023年2月20日。
- 47 HE, ‘Royal Holloway College’ (List Entry Number 1028946), ‘Official List Entry’, Details’ (SU 97 SE 1/52). <https://historicengland.org.uk/listing/the-list/list-entry/1028946?section=official-list-entry> アクセス日：2023年2月22日。他の登録建造物の記載事項の「Official list entry」にも同じ文言が説明されている。2023年11月登録例でも同様の説明が付記されている。St Nicholas Church, Lancashire (登録日01-Nov-2023) <https://historicengland.org.uk/listing/the-list/list-entry/1487414?section=official-list-entry> アクセス日：2024年1月4日。
- 48 <https://historicengland.org.uk/advice/planning/consents/lbc/> およびPDF資料 ‘Historic England 2021 Listed Building Consent: Historic England Advice Note 16.’ Swindon. Historic England <https://historicengland.org.uk/images-books/publications/listed-building-consent-advice-note-16/heag304-listed-building-consent/> アクセス日：2024年1月2日。現状変更の際の「登録建造物に対する同意」(Listed Building Consent)の変遷については大橋 (2007)：200など。また，家具・家財等の扱いに関わる裁判例として1996年の1件が紹介されている。同295。
- 49 同上。 30, 33, 48-54。
- 50 同上。 50。
- 51 E. Williams, *Thomas Holloway’s College: The First 125 Years, A Pictorial History*, (2012, Royal Holloway, University of London): 3。
- 52 同上。
- 53 イギリスを代表する新聞の一つタイムズによる大学教育の

- 情報サイト, タイムズ・ハイアー・エジュケーション (Times Higher Education) による全英で最も美しいキャンパス10大学の中で筆頭に紹介された. Times Higher Education website, 'The 10 most beautiful universities in the UK' (1 January, 2018). <https://www.timeshighereducation.com/student/best-universities/10-most-beautiful-universities-uk> アクセス日: 2023年2月24日.
- 54 HE, 'Royal Holloway College' (List Entry Number 1028946), 'Official List Entry', Details' (SU 97 SE 1/52). <https://historicengland.org.uk/listing/the-list/list-entry/1028946?section=official-list-entry> アクセス日: 2023年2月22日.
- 55 'Royal Holloway Campus Guide' (2019): 4-5.
- 56 同上4-9.
- 57 例えば, 'Royal Holloway Campus Guide' (2019); 'Undergraduate Prospectus 2021' (Royal Holloway, University of London).
- 58 'Our Brand Overview 2017' (Royal Holloway, University of London): 5, 15.
- 59 Historic England, 'Royal Holloway College' (List Entry Number 1028946), 'Official List Entry', Details' (SU 97 SE 1/52). <https://historicengland.org.uk/listing/the-list/list-entry/1028946?section=official-list-entry> アクセス日: 2023年2月22日.
- 60 Williams, *Thomas Holloway's College*: 35記載の写真(1900): RHC PH/101/7 Archives, Royal Holloway, University of London.
- 61 <https://weddings.royalholloway.ac.uk/wedding-venues> アクセス日: 2023年3月3日. これは外部向け会議のディナー用セッティングであるが, 大学ウェブサイト上の学生が写っている通常用のセッティングのダイニングホール写真でも椅子に関しては同様である. <https://www.royalholloway.ac.uk/student-life/our-campus/explore-the-campus/places-of-interest/founder-s-building/> アクセス日: 2024年1月3日.
- 62 Williams, *Thomas Holloway's College*: 25. <https://www.royalholloway.ac.uk/student-life/accommodation/undergraduate/founders/> 動画 'Founders Accommodation Tour' アクセス日: 2023年3月3日. <https://venue.royalholloway.ac.uk/accommodation/> アクセス日: 2024年1月4日.
- 63 <https://venue.royalholloway.ac.uk/accommodation/> アクセス日: 2024年1月4日. ゲスト向けウェブサイトでは, 別にあるゲストハウスを除けば学生の休暇中のみ宿泊できると書いてあり, ファウンダーズ寮の学生向け案内でも学期中のみ居住できるという規定があり, またファウンダーズ寮にはツインルームもあるため, 写真のゲスト用の部屋は, 学期中に学生が使用しているものと同じだと考えられる. <https://venue.royalholloway.ac.uk/accommodation/> および <https://www.royalholloway.ac.uk/student-life/accommodation/undergraduate/founders/> アクセス日: 2024年1月4日.
- 64 <https://venue.royalholloway.ac.uk/accommodation/> アクセス日: 2024年1月4日.
- 65 Williams, *Thomas Holloway's College*: 24.
- 66 Royal Holloway Library and Archives Twitter (18 November 2021) https://twitter.com/RHUL_Library/status/1461317379359748100 アクセス日: 2023年3月7日. 記事では「1886年以來変化がない」と書いてあるが, アーカイブズにある写真は1896年ごろ.
- 67 Williams, *Thomas Holloway's College*: 36; 'Royal Holloway Campus Guide' (2019): 6; <https://intranet.royalholloway.ac.uk/staff/news-events/news-articles/november-2018/founders-reading-room-is-now-open.aspx> アクセス日: 2023年2月24日.
- 68 'Undergraduate Prospectus 2021' (Royal Holloway, University of London): 35.
- 69 Williams, *Thomas Holloway's College*: 36の元となった写真(1937)はRHC PH/200/40 Archives, Royal Holloway, University of London.
- 70 'Founder's Reading Room is now open' (12 November 2018) <https://intranet.royalholloway.ac.uk/students/news-events/news-articles/november-2018/re-opening-of-founders-reading-room.aspx> 最終アクセス日: 2024年1月3日. 図7で示したWilliams, *Thomas Holloway's College*: 36の元の写真RHC PH/200/40 (1937) Archives, Royal Holloway, University of Londonとほぼ同じアングルで撮られた2018年の改装後のリオープニングの写真の1枚を図8に示した. 現在の使用の写真として, 例えば'Undergraduate Prospectus 2021' (Royal Holloway, University of London): 35もある.
- 71 <https://venue.royalholloway.ac.uk/filming/> アクセス日: 2023年3月3日.
- 72 <https://venue.royalholloway.ac.uk/filming/inside-spaces/> アクセス日: 2023年3月3日.
- 73 <https://venue.royalholloway.ac.uk/event-spaces/types/founders-boardrooms/> アクセス日: 2023年3月3日. さらに, 家具からは離れるが, ヴィクトリア時代の創設時の遺産を活かすという点で, カレッジのボイラーハウスも注目に値する. このボイラーハウスはファウンダーズ・ビルディングと同時に建設され, 現在もその熱源として機能しているが, 現代の小さいボイラーの導入によって空いたスペースを, セミナールーム, レクチャーシアター, カフェに利用している. 例えば元はタンクルームであったセミナールームは, もとものタイルや鉄のアーチを残しながら改装し, 名前も「タンクルーム・セミナールーム」と呼ばれている. <https://intranet.royalholloway.ac.uk/students/news-events/news-articles/october-2016/the-boiler-house-before-and-after.aspx> アクセス日: 2023年2月24日.
- 74 デイヴィース『芸術の都 ロンドン大図鑑』: 148-149, 228-229.
- 75 三島美佐子(2018)「九州大学の歴史的木製什器の保存と活用の新たなあり方に向けて」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16: 66.
- 76 同上67.
- 77 新井竜治・三島美佐子(2018)「九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16: 76-77.

参考文献

- 新井竜治『戦後日本の木製家具』(2014年, 家具新聞社).
- 新井竜治・三島美佐子(2018)「九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16: 69-85.
- 大橋竜太(2007)『英国の建築保存と都市再生——歴史を活かしたまちづくりの歩み』(鹿島出版会).
- 久末弥生(2017)「イギリスの考古遺産法制と都市計画」, 『創造都市研究 e』(大阪市立大学大学院創造都市研究科) 12-1: 1-8.
- 四元忠博『ナショナルトラストの軌跡1895～1945年』(2003年, 緑風出版).
- 四元忠博『ナショナルトラストの軌跡II 1945～1970年』(2015年, 緑風出版).
- フィリップ・デイヴィース著, 加藤耕一監訳(2017)『芸術の都 ロンドン大図鑑 英国文化遺産と建築・インテリア・デザイン』.
- 遠藤翔太・岡崎篤行(2017)「英国における登録建造物制度の運用実態 イングランド・グレーターロンドン及びその周辺を対象として」『都市計画報告集』(日本都市計画学会) 16-1: 32-35.
- 三島美佐子(2018)「九州大学の歴史的木製什器の保存と活用の新たなあり方に向けて」『九州大学総合研究博物館研究報告』15-16: 65-68.
- 三島美佐子・新井竜治・真保晶子・吉田茂二郎・岩永省三・折田悦郎(2023)「活用文化財としての歴史的木製什器の在野保存——新たな文化財概念の確立とその保存活用方策に関する実践的研究——報告書」トヨタ財団 2017 年度研究助成プログラム TYTID D17-R-0714 報告書: 38pp.
- E. Williams, *Thomas Holloway's College: The First 125 Years, A Pictorial History*, (2012, Royal Holloway, University of London).

Received Mar. 31, 2023; accepted Dec. 31, 2023

Case Studies of the Utilization of Buildings and Furniture as Cultural Heritage in British Universities: Considering Their Useful Points for the Preservation and Utilization of the Kyushu University's Historical Furniture Collection

Akiko SHIMBO¹⁾ and Misako MISHIMA²⁾

¹⁾College of Systems Engineering and Science, Shibaura Institute of Technology
Fukasaku 307, Minuma-ku, Saitama, 337-8570 Japan

²⁾The Kyushu University Museum
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581 Japan

This paper deals with three examples of the preservation and utilization of cultural heritage in the UK (mainly England and Scotland). One is the National Trust that provides various plans to raise public awareness of cultural heritage rooted in daily life. The other is the examples of a university and a college in the UK, which suggest effective ways of preserving and utilizing their historical buildings and furniture. These examples provide us with useful points for considering the future plans of the preservation and utilization of the Kyushu University Museum's historical furniture collection. For sustainable "open preservation" promoted by the museum and for the future renewal of the museum building as part of the university's historical buildings, the following aspects are pointed out: one is the need for citizens' participation and public discussion, and the other is more detailed research into and analysis of the preceded examples of British universities and colleges.

Key words: cultural heritage, historical architecture, historical furniture, The National Trust, University of St Andrews, Royal Holloway, University of London